

会計測定の理論

井尻雄士責任編集

中央経済社



昭和五十四年九月二十五日 第一版発行

会計測定の理論

総編集 黒澤清

責任編集 井尻雄士

発行者 渡辺正一

発行所 株式会社 中央経済社

東京都千代田区神田神保町一の三の二

電話 (二九九三) 三三七一 (編集部)

振替口座・東京 〇一八四三二

印刷 誠 製本 誠 本社

落丁・乱丁本はお取替え致します

3334-101483-4621

総編集のことば

本年は、戦後わが国の会計学界に一大転機をもたらした「企業会計原則」公表三十周年に当たるが、それは奇しくも、中央経済社創立三十周年の時期に合致する。ここに公刊する「体系近代会计学」全十四巻は、中央経済社の創立三十周年を記念する出版企画であるとともに、この三十年の歳月の流れの間における、わが国会計学のすべての分野にわたる系統的発展を刻み、かつ、将来の進歩のための道しるべをうち建てようとする試みでもある。

このような会計学のランドマークを建立しようという試みは、これまですでに十年毎に行われてきた。第一回目は、社業創立十周年を記念した「体系近代会计学」全九巻であり、第二回目は、社業創立二十周年を記念した「近代会计学大系」全十巻である。

第三回目が、今回の「体系近代会计学」全十四巻である。こうして十年毎に建ててきたランドマークは、わが国会計学の前進への指南車の役割を担うものといっても過言ではあるまいと思う。今やまさにランドマークというよりは、新しいビーコンと言うべきではあるまいか。

最近における会計学の発展は、その幅においても、その深みにおいても、大いに目をみはるに足るものがあ

る。その幅は、法会計学と経済会計学という二つの境界領域にまたがり、その境界のなかの広い場において、会計学の固有の領域はますます深みを加えつつある。その学問的基礎をなすものは、「会计学基礎理論」と「会計測定理論」である。近年における測定理論の発達は、現代会計学に科学的基礎を与えたものといえることができる。

このような土台の上に、「財務会計論」、「業績評価会計論」、「資金会計論」、「監査論」等すなわち「測定および伝達の体系」としての固有の会計学の領域が開発されてきたのである。しかもこの測定および伝達の体系としての会計学の範囲は、さらにこの十年来、「会計史及び会計学史」、「物価変動会計」等新しい研究開発によって拡大され、その深みを増すとともに、多彩な展望を与えるにいたった。とくに、近年注目すべきものは、国際会計基準の発展である。会計諸基準の国際的改善統一運動は、創始されてから、まだ日は浅いけれども、日本をふくむ創立委員国九カ国に加えて、数十数カ国がすでに準会員国として参加するにいたり、将来の力強い発展が期待されている。

前述の二つの境界領域、法会計学と経済会計学を代表する研究業績についてもふれておかなければならない。前者については、「企業会計法」、「税務会計論」等があり、後者については、「社会会計（企業社会会計をふくむ）」、「理論会计学」等がある。

本全集の編集に当たっては、上述のごとき現代の会计学の全領域について、私どもは、体系的知覚をもって、最善の研究業績を集大成するために、あらゆる努力を傾けた。全十四巻の各巻には、私からそれぞれ各編集責任者を委嘱し、その熱心な協力と、総編集者としての私との間の頻繁な意思疎通を通じて、新しい構想のもとに次のごとき体系的な分類・配列を行ったのである。

- 第一巻 会計学基礎理論
- 第二巻 財務会計論
- 第三巻 会計測定の問題
- 第四巻 業績評価会計
- 第五巻 原価会計論
- 第六巻 会計史および会計学史
- 第七巻 資金会計論
- 第八巻 インフレーション会計
- 第九巻 財務諸表の監査
- 第十巻 国際会計基準
- 第十一巻 企業会計法
- 第十二巻 社会会計
- 第十三巻 税務会計論
- 第十四巻 理論会計学

二十世紀に入ってから、ようやく新しい社会科学の一員として登場した若い学問、近代会計学は、いわゆるパラダイム変革の時期に際会しているのではあるまいかと私は思う。パラダイムというごとき科学思想史上の基礎概念は、会計専門家にとっては、まだなじみのうすいことばであるかも知れないが、私のいうところの新しいピーコンの役割を担うべき本全集の性格を説明するために、敢えて引用しておきたいのである。

科学上のパラダイムは、すくなくとも四つの要素から成る。第一の要素は、記号一般化 (symbolic generalization) である。自然科学や数学における記号一般化は、世界的に共通であり、確固不動の記号および符号の体系が存在していることは周知のところである。社会科学の領域では、共通の記号体系の確立は不十分であることをまねがない。しかし会計学には、ある程度記号一般化が行われている。たとえば最も単純なものだけあげておくならば、勘定的思考様式と勘定記号、バランス・シートの思考様式と貸借対照表的記号、コスト的思考様式とコスト記号等はそれである。

第二の要素は、仮説 (Hypothesis) やモデル形成に対する専門家集団の間における共通の信念である。成熟した学問における偉大な仮説や、卓越したモデル形成の例を、私どもはすでに知っている。幸いにして、会計学の領域でも、「企業会計原則」の設定や、「国際会計基準」の発表の試みによって、かかる共通の信念が生まれつつあるのを見ることができよう。

第三の要素は、共通の価値観ないし目的観である。価値観の多様化が問題となっている現代社会において、共通の価値観を確立することは至難の業であるかも知れない。価値観の変化は、パラダイム変革に導く出発点となるからでもある。しかし会計学の領域では、共通の価値観がめばえつつある。すなわち会計情報の測定および伝達における適正性の探求の理念、ならびに真実性の追求の理念はまさにこれである。

第四の要素は、研究業績の範例である。パラダイムという言葉は、この範例という觀念から導き出されたものであるが、成熟した学問における定理、法則、学説等の体系はそれを代表する。社会科学の領域においても、その例を見い出すことはかならずしも困難ではない。本全集におさめられた全研究業績は、現代の会計学の成果を代表する範例の名に値するものにしたいということが、私どもの念願である。

さて、本全集の執筆者総数百二十一名、最も斬新な最高の業績を集成し、ここにいわゆる会計学の新しいパラダイムの範例をつくりあげようと私どもは、努力をつくしてきた。終りに、各巻の責任編集者のご協力に感謝の意を表するとともに、総編集代表として、ご挨拶申し上げるしだいである。

昭和五十四年九月

黒 澤 清

序 文

体系近代会計学のこの第三巻においては、会計における測定という分野を中心に、会計測定に関する概念や理論が、全十章にわたって検討・解説されている。その章別の内容については、第一章で概説されているので、ここを参照されたい。

会計測定という分野は、比較的新しい分野で、会計測定 (Accounting Measurement) という言葉が使われるようになってからでも、まだ二十年にもならない位である。したがって会計測定の理論はまだまだ発展段階にあり、その体系もいたって未完成なものである。にもかかわらず、体系近代会計学の一卷として加えられ、執筆諸先生方の御協力により、ここに会計測定のある程度体系だった著書が出来上ったことは、この分野に関心をもっているものの一人として、誠によろこばしい限りである。ここに体系近代会計学総編集者・黒澤清先生ならびに各章執筆諸先生方に深く感謝の意を表して序文にかえる次第である。

昭和五十四年九月

井 尻 雄 士

会計測定の概説

第一章 会計測定の概説

会計測定の構造

第二章 測定理論の基礎

第三章 会計測定の経済的実体

会計測定の側面

第四章 会計測定の公理的側面

第五章 会計測定の言語的側面

第六章 会計測定の制度的側面

会計測定の実務

第七章 会計測定と財務会計

第八章 管理会計情報システム

会計測定と情報

第九章 会計測定と情報処理

第十章 会計測定と情報評価

カーネギーメロン大学教授

井尻雄士

東北大学教授

菊地和聖

神戸大学教授

中野勲

中央大学教授

原田富士雄

東京大学助教授

斎藤静樹

中央大学教授

田中茂次

大阪市立大学教授

山形休司

横浜国立大学教授

吉田彰

西南学院大学教授

平田正敏

一橋大学助教授

伊丹敬之

目 次

会計測定の概説

第一章 会計測定の概説

一	本巻の概要	三
1	会計測定について	三
2	会計測定の構造	四
3	会計測定の側面	六
4	会計測定の実務	八
5	会計測定と情報	一〇
6	会計測定の抽象性	一二
二	会計測定の影響	一三
1	人と測定	一三
2	測定対象としての人	一五
3	業績評価	一六

会計測定 of 構造

4	会計責任	一九
5	会計人の役割	二一
6	会計原則の役割	二三
7	会計原則の経済的影響	二四
8	むすび	二六

第二章 測定理論の基礎

一	会計・言語および測定	三二
1	会計と言語	三二
2	測定の意義	三三
二	表現定理	三五
1	集合・関係・関係システム	三五
2	対応と写像	三九
3	完全測定と準同型写像	四一
三	測定尺度とその一意性	四四
1	測定尺度の性質	四四
2	測定尺度の一意性	四五
3	測定尺度の分類	四七

4 測定の態様	五
四 数詞的命題の有意味性	六

1 有意味性の定義	六
2 統計の有意味性	九

第三章 会計測定の経済的実体	六
----------------	---

一 経済財の概念	三
----------	---

二 経済的価値の概念	六
------------	---

1 所有価値	六
--------	---

2 利用価値	九
--------	---

三 経済的価値と会計測定	七
--------------	---

1 現存の慣行的会計測定と経済的価値概念	七
----------------------	---

2 あるべき会計測定と経済的価値概念	八
--------------------	---

四 結 論	八
-------	---

会計測定の側面

第四章 会計測定の公理的側面	七
----------------	---

一 伝統的な理論構成について	七
----------------	---

1 歴史的原始主義会計の理論構造	八
------------------	---

第五章 会計測定と言語的側面

2	会計公準と会計原則	九〇
二	公理的会計理論の登場	九〇
1	公理と公準	九四
2	国民会計の公理化	九六
3	会計一般理論の構想	九八
4	歴史的原価主義会計の公理化	一〇一
三	会計理論と測定理論	一〇五
1	測定への関心	一〇五
2	測定概念の拡張	一〇八
3	むすび	一一一
	会計測定と言語的側面	一二三
一	はじめに	一二三
二	所得概念の定義と測定操作	一二五
三	概念の解釈と測定の言語性	一二二
四	言語分析的方法的枠組	一二六
五	会計言語の共時態と通時態——会計測定論の課題	一二三

第六章 会計測定の制度的側面……………一三七

一 制度会計と会計測定……………一三七

1 オペレーショナル・アカウンティングとエクイティ・アカウンティング……………一三七

2 二つの意思決定……………一三九

二 法一般の概念……………一四四

1 法の外的視点と内的視点……………一四四

2 法的ルールの二つのレベル……………一四七

3 法の開かれた構造……………一四九

三 会計規範の不確実性……………一五三

1 会計測定の恣意的性格……………一五三

2 会計法規の限界……………一五七

3 会計行動の主観的性格……………一五九

会計測定の実務

第七章 会計測定と財務会計……………一六五

一 財務会計の機能と目的……………一六五

二 財務会計での測定の特徴……………一六九

三 会計測定の特徴……………一七五

四	インフレーション会計	一八〇
五	社会責任会計とリース会計	一八五
	第八章 管理会計情報システム	一九一
一	管理会計の機能	一九一
二	意思決定と業績評価	一九三
三	会計情報の意思決定プロセスへのアプローチ	一九四
1	会計情報に対する二つのアプローチ	一九四
2	合理的な意思決定	一九五
3	現実の意思決定プロセス	一九五
四	ASOBATの会計情報システム	一九六
五	管理会計の情報空間	一九九
六	意思決定のための原価概念の展開	二〇一
七	プロジェクト管理のための会計情報	二〇四
1	損益分岐点分析	二〇五
2	直接原価計算	二〇六
3	資本予算	二〇七
八	意思決定プロセスの行動科学的認識	二一〇
九	直接原価計算方式の行動科学的価格決定	二二二

十 管理会計情報システムの行動科学的モデル	二二五
十一 管理会計の外延的展開	二二〇

会計測定と情報

第九章 会計測定と情報処理	二二五
---------------	-----

一 会計情報システムの要件	二二五
二 事象学派の会計理論	二二八
三 井尻教授の多次元簿記	二二三
四 コラントニイによる展開	二二七
五 リーベルマンの提案	二四五
1 MDBについて	二四六
2 UDSについて	二四六
3 UDFについて	二四八
第十章 会計測定と情報評価	二二三
一 はじめに	二五三
二 情報評価へのアプローチ	二五五
1 利用者意思決定モデル・アプローチ	二五六
2 費用便益分析アプローチ	二五八